

ひと おさ てん つか
人を治め天に事うるは、嗇しやくに若くは莫なし。夫れ唯ただ嗇しやく、是を以て
はや ふく はや ふく
早く服す。早く服するは、これを重ねて徳を積むと謂う。重ねて
とく っ すなわ か な な
徳を積めば、則ち克たざる無し。克たざる無ければ、則ち其の
きよく し な そ きよく し な
極を知る莫し。其の極を知る莫ければ、以て国を有つべし。国を
たも はは もっ ちようきゆう
有つの母は、以て長久なるべし。是を、根を深く柢を固くし、
ちようせいきゆうし みち
長生久視するの道なり、と謂う。

【大体の意味内容】人を治め天に仕えるには、過剰な利益を削り、過剰な支出を抑えるように、得るも払うも節制することが第一である。いずれにおいても過剰さを慎むのが「嗇」である。そうすることで、早く宇宙の道理に従える自由を得られる。本来の「理」に従い、「理」の中に在ることが、自分自身の心身が最もものびやかに活動できる合理性という「徳」を「積む」ことにもなる。今日、自分本来の「合理」をひとつ見出し、明日また別の合理を見出してゆけば、その「徳」は足し算ではなく掛け算の「積」として大きく確かなものとなつてゆくであろう。こうして「徳」を「累積」してゆけば、いかなる障碍があるうとも、克服できないものはない。そもそも「理」の中に在れば、障碍を困難とは思わないのだから、自分の究極の限界などというものを知ることがないのである。何事も限界とは思わぬ 志が、国を生かすための母が「嗇」であり、それによつて国も人も長久の命脈を保てる。これを、「物事の根柢を深く固め、長しえに久しく生きるの道」という。

私は小学3年生から5年生までの間、剣道を習っていました。

左利きの私は、右手を上、左手を下にする竹刀の持ち方に違和感を覚えました。左利きの竹刀の重みを支えなければならぬから、左利きのほうが有利なへらいだ」と師範に言われ、そうかと思って取り組んでいました。が、どうしても、すぐに疲れてしまいました。ほかにもいろんなスポーツに取り組んでいたのが体力にも腕力にもある程度自信があったので、剣道だけは、いへら竹刀を軽くしても、友だちより先に腕が上がらなくなってしまうのです。結局、段を取ることもなくやめてしまいました。ずっと謎のままでいたのですが、後年、ある剣道家(剣道研究者でもある方)と話す機会があって、この謎について質問しました。氷解しました。

右利きの人は、力が弱い左手で下を持つから、竹刀全体の重みを支えるだけであとは右手に任せろ。力の強い右手が負担の軽い上のほうを持って、太刀筋をコントロールする。両手とも、無駄な力を入れないからバランスが取れてしなやかな太刀振りができるのだ、と。

目から鱗でした。

剣道の決まりごとになっている、右上・左下の竹刀の持ち方は、右利きによってこそ合理的であって、左利きにとってはアンバランスもいところだったわけです。非合理的で、「身体道徳」に反するものでしかない。くだんの剣道家の方も「剣道界は硬直してる」と独の言ちつらつしゃいました。

私は「型」は大事だと思っています。でも、生きた「理」を考えない硬直した形式論は、「型」ではなく「枷」に過ぎません。「手枷」「足枷」「首枷」の「枷」です。初めから「自由を奪つ」「目的のもの」。

どんな分野でも、最初はお手本のまねをして、基本の「型」にはまる「練習を積みますが、まずは多くの人に共通の「合理」を体得する。それから工夫を重ねて「型破り」していきます。

「型」にはまる「こと」は不自由になることではなく、自分の心身によってなるべく自由を得られる流れを獲得することなのです。段階が進んでくると、いよいよ、他人とは違った自分独自の「理」を追求して、「型破り」するわけです。

「型」がなければそれを「破る」といってもできません。初めから「型」も何もなしの「単なる」型なしです。それではへらカッパのしつけでも「様」ならぬ。「それを」無様「といえます」。

自分の身の周りにある様々な「お手本」は、ぜひ大事にしましょう。